

第五章 毛沢東と中国革命

(1) 毛沢東とアナキズム

毛沢東とアナキズムの関係については、すでに触れてあるように、若き日の北京大学の助理時代に遡る必要がある。ここで彼は冒頭の文章にもあるように、アナキズムから「大きな影響を受け」たのであり、「無政府主義の提唱する多くの議論に賛成して」いたのである。発言中の、しばしば私の家に訪れて議論したという学生は朱謙之であるが、彼は北京大学のアナキストで、学生新聞にも論調を展開する優秀な学生であった。このアナキズムに囚われている毛沢東の北京時代の環境については、もっと知られる必要がある。ところが、どの伝記作者においても重要視されず、極少しか語られていない。ただアメリカの詩人にして小説家であるロバー

ト・ペインのみは、他にみられない注視の眼をもって、次のように描いている。

「こういう状況の中で毛は、バクーニンが書いた小冊子の翻訳を見つけ、自分の僅かな友人に自分は無政府主義者だと告げている。バクーニンの無政府主義と中国の伝統的な道教との間には、いくつかの類似点がある。毛は無政府主義に心を動かされ、中国の諸問題に対する唯一の解決法は完全な地方分権にあるのではないか、政府などは暴力によって覆すべきではないだろうか、と思うようになった。そのような地方分権策が、日本や西欧諸強の要求に対する中国の抵抗力を、いっそう弱めるに過ぎないことは忘れていたのである。かれは他の無政府主義者と文通したり、ある時は無政府主義団体の設立を企てたりした。当時、無政府主義的風潮は世上に蔓延していて、特に湖南では工業労働者の間にその小団体があつた。しかしながら、冬の到来とともに、無政府主義に対するかれの狂熱も覚め、もっと単純な楽しみと変った。」（『毛沢東』）

以上から察すると、毛沢東はバクーニンを通じてアナキズムを知ったようである。しかし本人自身もいつているように、この時期はアナキズムが横行しており、クロボトキン初め他のアナキズム文献も多く現われていた。第一師範時代には、トルストイを盛んに賞揚していたし、その延長上にアナキズムが置かれることは、当人の思想的系譜からいっても極めて自然なこと

であった。ペインという人は第二次大戦中は重慶と昆明で、文化連絡将校として、文学と工学の教授として活躍した人である。その間、延安を訪れて毛沢東とも面談している。そうした人だけに、叙述には、時折類書にみられない記述がみえる。さし当りここでは、毛沢東が「自分は無政府主義者だ」と語っていたという辺りは、ペインが中国滞在中に毛の友人から耳にしたもののように実感がこもっている。

結局、毛沢東がアナキズムに熱狂的に魅せられていた時期は、一九一八年（二十六歳）夏、留仏勤工儉学の留学生とともに出郷して、冬に入るまでの半年間くらいということになる。この年十一月には、自分の職を斡旋してくれた北京大学教授、中国マルクス主義の始祖といわれる李大釗の『庶民の勝利』『ボルシェヴィズムの勝利』が「新青年」誌上に発表されており、冬には北京大学内にマルクス主義研究会が同じく李によって組織されているので、大体それまでということになる。（スノーに「助理員時代に李大釗の下に急速にマルクス主義の方向に成長し……」と語っている。）

しかし先に述べた通り、その後マルクス主義をとったとしても、そう単純にアナキスト・毛がマルキスト・毛に転向したというわけではない。むしろアナキズムを核にしつつ、その外面をマルクスズムで武装したのである。一九二〇年冬二度目の北京行きの際、数冊のマルクス主

義の文献を読んで信念を固め、「私はその後それについて逡巡したことはありませんでした」（『赤い星』）というが、それほどの信念は、逆に毛におけるアナキズムという土台を考えることで、いっそうよく理解できるのである。そうでなくとも毛はマルクス主義者である前に、詩人であり、政治家であり、さらに中国人でもある。詩人・政治家がそう単純であり得る筈がなく、中国人の伝統性を含んだ上でのマルクス主義なのである。

ことにそれは「民衆の大連合」（一九一九年七月～八月「湘江評論」）のような、両者の中間期においていっそう明らかである。ここで彼は運動の推し進め方として、「小連合」を基礎として「大連合」へという方式を提示しているのであるが、ここにはアナキズムの如実な姿がある。

個を尊重するアナキズムにあつては、マルクス主義のような没我的団結を嫌い、個の協力としての連合を主張する。全体のメカニズムの部品的存在であるよりは、各々が生きあい、その相乗効果の方が大きいとするのである。それはようやく近代に目覚めつつあった五四の、〈個性開放〉の思潮とも見合っていた。ここでは毛沢東は、マルクスよりもクロボトキンに共感を示し、連合と相互扶助のアナキズムの姿勢をとっている。論文の啓蒙的な雰囲気そのものが、クロボトキンの『青年に訴う』に似かよっており、多分その故に今日では、どの毛沢東選集にも入らないのである。

ただし毛沢東が「民衆の連合」を主張する背景には、クロボトキンよりもっと身近な後援者があった。李大釗である。マルクス主義者ふうになると、〈時代の一定の制約もあって……〉ということになるのであるが、毛の師である李大釗の初期において、甚だしくアナキスティックなマルクス主義であった。

李は毛よりさらに、トルストイの影響を大きく受けていた。マルクス主義の客観主義的なるのに対し、主観主義的であり、熱烈に自己と青春を謳歌した。十月革命に直ちに賛意を表したといえども、そこには民衆の連合と相互扶助の考え方があって、やはりアナキスティックなのである。そうした李の主としてトルストイの影響による意識の変革（『物心両面の改造』）の思想は、そのまま毛によって、「思想改造」「主観能动性論」として受けつがれていった。

マルクス主義者となった毛沢東が、アナキストを批判することはむしろである。第一師範卒業後、一時彼は国文教師を勤めていたが、その時に第一師範内のアナキズム・グループに反対しているし、黄・龐の運動にも批判的であったことはすでに述べた。しかしその場合にも、多分に同情的であり、現実的な提案として、やはり「小組織・大連合」を主張していたのである。事実、五四においては各界連合会がぞくぞくと生れ、多大な成果を上げていた。そしてこの連合思想がやがて純然たるマルクス主義に吸収され、民族統一戦線思想と化していったので

ある。

毛沢東初期の活動の中で、とりわけ一九二〇年の湖南自立運動は、背景にアナキズムがあったとみていいのではないか。毛沢東自身はスノーに「私たちのグループは、北京との関係を断てば湖南省はもっと急速に近代化すると信じて、その分離を要求して運動しました。当時の私はアメリカのモンロー主義と門戸開放の熱心な支持者でありました」と応えているが、地域自治は近代民主主義の産物であると同時に、アナキズムにおいて最も徹底される。国なり、県なりは、地域自治体の連合体以外の何ものであってもならないのである。毛沢東らは旧式部落主義ではない、「湖南人自決主義」を掲げて運動を進めた。その結果新しく入ってきた軍閥も、投機的にしる、「省憲法」を制定し、「連省自治」を提唱せざるを得なかった。

この毛沢東の、多分にアナキスティックな運動を今日評価する必要がある。毛沢東は先年キッシンジャーと会見の折、〈アメリカの連邦制度に見習わなければいけない〉と極めて示唆的な発言をしているが、それは単なる外交辞令ではない。専制主義と地域自治の問題として考えれば、有史以来の大問題なのである。

(2) 農民運動の直接性

一口に中国革命は農民革命といわれる。ブハーリンによると、「植民地問題は結局において、世界的規模における都市と農民との間の交互関係に属する問題に他ならない。その関係下において、農村は封建的地主と資本家的搾取と国民的不平等からの三重の圧迫を受けているのである」(『農民問題綱領』)。半植民地中国においても同じことで、その革命は必然的に農民革命たらざるを得なかった。しかもそれはスターリンが「中国革命の特徴は軍事革命にある」と規定したように、農民運動即農民戦争であることによって、中国革命の事実上の基本的パターンが定着したといえる。あとはどう戦略戦術的にこの農民部隊を運用するかどうかの問題であった。むろん中国革命に対する、スターリン・コミンテルンの指導はあった。しかしその指令はレーニン報告(コミンテルン二大会)の「後進国においては、いかなる民族的運動もブルジョア民主主義運動でしかあり得ない」という基本認識にたつて、絶えず国民党と地主との妥協を要求していたのである。そこにはロシアの周辺で革命騒ぎを起してもらって、せっかく打ち立てた許りの社会主義政権をおびやかしてもらいたくない、という念願も含まれていた。しかしや

がて都市部の労働者運動が全く閉ざされ、毛沢東の農民ゲリラの活動しか残らなくなると、コミンテルンはその軍事活動を認めないわけにはゆかなかった。それでも、絶えず農村遊撃戦なるものを警戒視していたのである。

その典型的な例はトロツキー『中国の農民戦争』(一九三三・九)に表われている。トロツキーはここでロシアの経験として、ネストル・マフノ指揮下の「無政府主義的」軍隊の例を挙げ、「ゲリラ軍が自衛軍の背後で行動していた限り、彼らは革命のために役だった」としている。「ところが都市の中では、しばしば労働者や地区の党组织と衝突した。衝突はまたバルチザンと正規の赤軍との遭遇中にも起り、ある場合にはそれが極度に困難で、尖鋭な性格をおびた。」地主の復活に対して勇敢に戦った多くの農民軍隊が、勝利後には一変して反革命の道具になった。」

トロツキーは農民軍が正規軍へ吸収されることの拒否的態度や、地方的規模に基づいて、中央集権的な計画化を嫌う傾向をとりあげて批判しているのである。「労働者は社会主義的立場から問題に近づくが、農民の見地はプチ・ブルジョア的である。」労働者と農民の立場の違いは、やがて農民軍による労働者の虐殺を招くことになりかねないことを示唆していた。

こうした見解を受けついで、中国では陳独秀や李立三がやはり同じ意味のことを主張してい

たのである。そして妥協的に農民軍を評価しても、それはあくまで労働者運動を助けるものに他ならず、労働者の住む都市攻撃をもって農民軍の任務としていた。それに対して毛は、中央の言を表面だけは認めつつ、実際は自分流のコースを歩んだ。そして遂に農村に根拠地を打ち立て、農村をもって都市を包囲する中国革命の基本戦略を確立したのである。

この毛の農民革命方式が産みだされる土台（自信の裏づけ）となったのが、湖南での農民運動の体験であったことはいうまでもない。毛自身もそれを認めていつている。「それまでは、私は農民の間の階級闘争の運動を十分に理解しなかったのですが、五・三〇事件（一九二五）以後、またそれにつづく政府活動の大波がつづく間に、湖南の農民は非常に戦闘的になってきました。」（『赤い星』）

よく知られていることであるが、中国の革命運動は一九二五年の五・三〇をもってピークに達し、労働組織は飛躍的に伸びた。しかしその後段棋瑞が登場するに及んで、事態は一変して暗い時代が訪れる。ところが北方の沈滞に反し、南方では逆に革命的気分が盛り上がり、農民運動は急速に伸びた。なかんずく毛沢東の郷里湖南の拡大は素晴らしいもので、一九二七年二月にはすでに百二十万人の組合員を擁していたのである。

こうした農民運動の躍進の模様を調査するべく、毛は郷里湖南へ送り込まれた。その調査の

結果が、有名な『湖南農民運動の視察報告』（一九二七・三）である。その中で毛はいつている。「ごく短期間に何億という農民が中国の中部、南部および北部の諸省から立ち上がるであろう。その勢いは嵐のように速く、また猛烈であって、どんな大きな力でもそれを押さえつけることはできない。」それはまさに、中国過去数千年来の農民叛乱と同じ形のものであった。従って現在を意識的、組織的だけにもっと大規模なものである。その農民蜂起の中で、土豪劣紳、不法地主の封建勢力が打ち倒されていった。「孫中山先生が四十年間も国民革命に努力しながら、やろうとしてやれなかったことを、農民は数カ月の間にやり遂げてしまったのである。」（『報告』）

しかも農民は封建勢力を倒した許りでなく、自ら道路や堤防を修理し、教育を広め、骨牌・バクチ・阿片のような悪習慣を禁止した。そのいづれもが急速に行なわれ、ことに匪賊に至っては、農民組合が盛んなところでは影さえ見えなくなった。これは禹・湯の時代にもない奇蹟的な現象だったのである。こうした農民の革命力を評価して毛沢東はいつている。「論功行賞を行なう時に、民主革命完成の功績を十点とすれば、市民および軍隊の功績はわずか三点であって、農民の農村革命における功績は七点でなければならない。」（『報告』選集ではこのところは削られている。）

ここで毛がこの農民暴動の直接行動と、民衆自身の自生的整序力を肯定していることに注意すべきである。なぜならマルクスはブランキの「蜂起による権力の奪取」を、いわゆるブランキズムⅡ一揆主義として批難していたからである。マルクスは工場労働者による組織革命を念頭においているから、当然なことであった。またボルシェヴィズム革命にあつては、革命後といえども民衆の自己管理は簡単には許されない。「ソヴィエト」は短時間のうちに機能を中央権力に吸い上げられ、民衆はプロ独裁の名の下に、ブチ・ブル性を抑圧される。ところがマルキストの毛が、暴動による急速な実現性と、自らの秩序の自生性を認めているのである。その点、著しくアナキズム的であるといわざるを得ない。

しかも暴動を認めることによって、必然的に、農民よりさらに質の低いルンペン・プロの功績を正當に評価せざるを得ない。湖南の農民運動では、「全然職業のない」土地もなく、資金もない連中が農民組合において大いに活躍した。例えば衡山県の郷農民組合の職員についてみると、全体の五〇％が極貧農層によって占められている（次貧層四〇％、窮乏知識人一〇％）。紳士たちのいう「ごろつき」がなければ、革命もまたあり得なかつたのである。「われわれはあの『ごろつきの運動』といい、『なまけ農民の運動』という反革命の議論に反対しなければならぬ。」こんなことを書くものだから、この『報告』は中央の入れるところとならず、毛

は極左冒険主義者ときめつけられたのである。

この毛の、貧農（「極貧」を含む）に依拠した革命集団をもつて、敵を包囲するというやり方であるが、これは運動における具体そのものであつたが、他方では、バクーニンを意識していたことが感じられる。バクーニンは農民を同盟軍とするマルクス方式に反対し、農民の革命的能力を高く買っていた。そして組織論は、「下から上へ、円周から中心へ」としていたのである。彼によれば、これまでのあらゆる革命はその反対の、「上から下へ、中心から円周へ」であつた。それを逆転することが肝要なのである。マルクスと烈しい論争を捲き起した国家の廃止説も、この原理を基として行なわれていた。

むろん毛はマルキストであつて、アナキストではない。ただ若き日に知つたバクーニンの組織原理を、マルクス主義の立場で利用しつつ、中国革命に甦えらせていったものと推察されるのである。

(3) ルン・プロの軍、匪賊の党

一九六五年、文革の最中、毛沢東はいつている。「われわれは戦争には一冊の本も持つてゆ

かない。ただ敵、味方の形勢を分析し、具体的状況を分析するだけである。」「諸君はみな西洋哲学だが、私は土着の哲学である。」

この自分をいったん無にしての土法において、毛は湖南の貧民中の極貧民、即ちルンペン・プロの革命性を認めざるを得なかった（一九三〇年「興国県の調査」では、区政府委員十八人のうち、六人がバクチ打ちである）。その点では『中国社会各階級の分析』と若干のズレがあるので、『分析』においてはルンペン・プロは、農業プロと区別されている。ルンペン・プロとは匪賊、兵士、乞食、盗賊、娼妓の類いであって（その人口二十万人以上）、最も不安定な生活をしており、各地に政治と経済の互助機関である秘密結社を持っている。「これらの人々を処理することは、中国の最も大きな、最もむずかしい問題である。……これらの人々は勇敢に闘うので、適切に指導すれば、革命の力に変えることができる」と半分革命性を認め、半分やはりマルクスの危険視している。事実中国革命において、秘密結社は革命の側にも弾圧の側にも役立っている。

これが『報告』となると、「極貧」といういい方に変るのであるが、中身は完全失業で、「外に出て兵隊になるか、人に雇われて働くか、あるいは乞食になってさまよう以外にはどうしようもないもの」というから、実質的に『分析』のルン・プロと同じである。ルン・プロという

いい方为了避免のために「極貧」といういい方をしたのであろう。（原文では「極貧」とは、「いんちき賭博の麻雀などをやる、土農工商の枠内に入らぬアウト・ロウだ」と述べている。）このごろ、つき連中である「極貧」を彼は大いに讃えた。「あるいは非をなし、悪をなし、盗賊をなす」（原文）反社会的な存在であるが、その破壊力を評価したのである。それ故、中国語で農村のあぶれものを「地痞」というが、党中央には毛のことを「地痞主義者」と呼ぶものもいた。

ここに中共及び紅軍が、遊民・会党・匪賊と密接な関係を持たざるを得ない理由がある。普通中国革命史にあつて、孫文は当初においては会党（主として三合会）を基盤として失敗し、毛は近代的政党としての共産党に拠つて成功したということになっているが、必ずしもそうではない。むしろ伝統的土着政治勢力である、哥老会その他の秘密結社（匪賊）にかなり頼つていたのである。だからこそ毛はその匪賊工作偏重を批判され、その部隊を共産匪あるいは朱毛匪とされたのである。

紅軍における秘密結社参加の代表的な例は、賀竜將軍である。賀竜の父親は哥老会の頭目の一人といわれているが、彼が十六歳の時に土匪の生活が始まった。丁度大飢饉にも拘らず税のとりたてが平年と変わらないので、彼は数人の仲間と隣村の警屯所を襲い、銃四〇丁を奪つて、山に逃げ込んだのである。それから三省にまたがって流動し、行く先々で地主や税吏を殺戮

し、その勢力一万人に達した。これではもう討伐不可能と、湖南省政府が提携の手を差し伸べたところから、彼の紅軍への道が開かれることになった。

賀竜は天性磊落で、彼が兵士に与える訓辞の中でもしょっちゅう「他媽的」とか「忘八蛋」という言葉が飛び出すといわれる。そういう彼を兵士たちは愛して、「賀老総」（賀のおん大將）と愛称で呼んでいる。（辛亥革命以前において朱徳は、九人の妾を持つ、阿片吸引者であった。）

毛沢東自身に関する例では、かの有名な井岡山における話がある。毛は一九二七年、秋收暴動の失敗の後、井岡山に立てこもるのであるが、その時、地元の匪の頭目袁文才が同じ土匪の王佐とともに出迎えた。（兵員六百、銃百二十余。）袁文才とは、それ以前に友人の貧農出身匪賊である金亦漢を介して、盃を交わしたことがあるといわれ、もともと面識があったのである。その時、湖南匪である周文や陳光保らの配下も共産軍に編成された。その後南昌で破れた陳毅や朱徳の軍が加わるまで、毛は全く赤い匪賊として暮らしていたのである。

秘密結社（匪賊）は秘密であるが故に、どの場合も、内部だけでしか通用しない暗号や儀式を持っているものである。毛の共産党も近代政党とはいえず、そうした暗号や儀式と無縁ではあり得なかった。会党や匪賊が加盟する時には、『三国志』の英雄たちが桃下で誓いあったよう

に、死を賭して誓いあう。その匪賊の入会式に習って、毛の党も深夜秘かに祠堂において入党式を行なっていた。誓詞の文言は異なっても、かつてのA・F（アナ連）の連中も同じことをやっていたのである。

毛はその他、匪賊から色々のことを吸収している。ことに匪賊流の戦闘方法に教えられたし、思想改造（モラルの向上）のやり方について学んだ。戦闘方法については、毛は井岡山に着いて間もなく、かつてここを本拠とした朱という匪賊のことを話して次のようにいっている。「軍閥や反動政府が何十年も討伐したがどうしても捕えることができなかった。彼の秘訣は『打圈』さえできれば、戦争はできずともよい』というのであったが、われわれは『戦争もでき、打圈もできる』ようにしよう。」（『星火燎原』）

この「打圈」というのは具体的にはどんな方法か判らぬが、この時毛が孫子を読んで定めた「戦闘四原則」に関係すると思われる。それが即ち有名な、

敵進我退

敵進めば我退き

敵止我擾

敵止まれば我乱し

敵避我撃

敵避ければ我攻め

敵退我進

敵退けば我進む

——である。スノーは「あとで私は遊撃隊の課程には水滸伝に書かれているような封建的一騎打戦の時代のように、古い中国の呐喊の演習が入っていることを知った」(『赤い星』)ともいっている。毛は(その他、帰郷したがる俘虜は路銀を持たせて帰らせる等)、昔日の大衆本中の匪賊のやり方にも充分学んでいるのである。

匪賊が社会的半面と非社会的半面の、両面を持っていることはいうまでもない。そこに思想改造とモラルの問題が、からんでくる理由がある。井岡山で匪賊の頭目、袁と王は、それぞれ南湖南の農民部隊の大隊長と連隊長に任命されていた。ところが両者とも口ではうまいこといいながら、実際にはいつも怠けて妨害し、計っていたのである。ある日紅軍の工作者が彼らによって殺された。それをしもこらえて、意識的に段階を追って、元匪賊の思想改造の工作が辛抱強くつづけられたのである。

“思想改造”ということになると、紅軍自体がルン・プロの集団みたいなもので、そのために自ら絶えず改造する必要があった。旧中国では「好人不当兵」(よい人は兵隊にならない)というが、出発点では紅軍といえども同じことだったのである。賀電は哥老会のむずかしい儀式に非常に詳しく、どんな村にでも武装せずについて、哥老会に入り込み、軍隊を組織した。一度ならず、全員哥老会員だけの支隊ができたのである。紅軍兵士の不足分は、絶えず匪賊か

ら補充していた。毛が長征を終えて陝北延安に辿りついた時、匪賊を集めて、長征中激滅した部隊の補充に当てたことは周知である。甘肅、寧夏辺りには、勇敢な回教匪賊が多かったのである。

そこにいわば中共独自の“思想改造”方式の出発点があった。「このような事情の下では、政治訓練を強化する以外に方法はない」(『井岡山の闘争』)。しかも毛は匪賊を政治教育によってつくり変えることができる、強い自信を持っていた。もともとそれを受け入れる地盤が匪賊の側にもあった。そうした状況の下で、「貧農からは何もかも没収しない。」「自分の寝た藁席は巻いて返す。」「借りた物はすべて返す。」等の、「三大規律・八項注意」の紅軍モラルができ上がったのである。ただしこのように盟約をもって忠誠を誓い、自己を正すやり方は、それ以前には心社のアナキストたちが行なっていた。さらに遡れば、長髪賊(太平天国軍)が実行していたことでもある。長髪賊は「犯すな」「盗むな」「ばくちを打つな」等、単純ではあるが厳しい禁欲的な戒律を設けて、対民衆の面では大きな成果を上げていたのである。

そしてモラルあるいは戒律の延長するところで、「党内の誤った考え方は正について」(一九二九)ということになった。毛がそこに書いている軍内の「誤った考え方」(単純な軍事的見地、極端な民主化、非組織的な見地、絶対平均主義、主観主義、個人主義、冒險主義)

は、ほとんど全部とっていいほど、遊民から発する思想である。ことに「流冠（匪）的考え方」の批判は、遊民そのものを問題としていて興味深い。毛はそこで次のようにいつている。「赤軍内には、ルンペン的な要素が非常に大きな数を占めており、また全国でもとくに南方諸省には大きなルンペン大衆がいるので、赤軍内に流冠主義的な政治思想が生れてゐる。……したがって流冠的な考え方を一掃することは実に赤軍の思想闘争の重要目標の一つである。歴史上みられた黄巢、李闖流の流冠主義の存在はもはや今日の環境では許されないとを知らねばならない。」ここではすでに『報告』に見えてくるような極貧層への興奮した、無条件の信頼、といった口調は消えてしまっているのである。

(4) 無政府の解放区

共産党内においては、早くから匪賊の評価をめぐって論議が交わされていたようである。

ことに白蓮教の流れを引く、典型的な社会派匪である河南の紅槍会のような存在については、革命の同盟軍とみるか、みないかで、真向うから意見が二つにわかれていた。（紅槍会は後に東北抗日義勇軍とともに戦った。）陳独秀・瞿秋白のようなプロレタリア派は当然のこと

反動的なものとして否定し、李大釗のような自覚能動のロマン派は肯定した。決議においても折衷案として、一時利用と警告との双方の内容が盛り込まれていたのである。毛が一方では自信を持って匪賊と提携し、他方では党中央から批判されていた背景が、これであった。毛の共匪合作路線は必ずしも、彼の独創案というわけでもなかったのである。（李の背後にはさらにバクーニンがいる。バクーニンはその『革命家の教理問答』にいう。「山賊——ロシアにおける唯一の真正の革命家——の勇敢な世界と提携しよう。」）

同じようなことは「根拠地論」についてもいえる。通常「根拠地論」はまるで毛の発明品かのようにいわれるが、そうでもない。なぜなら「根拠地即ソヴィエト」と解すれば、起原はロシア革命に始まる。ロシア・ソヴィエトは、さらにパリ・コミューンにまで遡ることになる。

一九二六年、コミンテルンはその中国における可能性を重視し、南昌や長沙の都市攻撃においてもソヴィエト建設を目標としていた。そうしたコミンテルンの方針を受けて中共第六回大会（一九二八・七）では、労働革命軍の遊撃戦を支持し、ソヴィエト政権の闘いを訴えていたのである。

とりわけ「中国の赤色政権はどうして存在することができるのか」（一九二八・十）に現わされた、白色政権下の中国の赤色政権の存在可能性を描いた文章は、事実上スターリンの「一国社

会主義論”を下敷きにしたものである。スターリンは資本主義と革命勢力の不均衡な発展性に基づいて、ソ連一国でも社会主義を建設してゆけることを述べた。それを毛は中国にあてはめて、資本主義的に統一されていけない「地方的な農業経済」と、「勢力分割による帝国主義の分裂・搾取」によって、白色政権は絶えず争っているから、その間を縫って赤色政権は存在してゆけるとしたのである。むしろそのためには、民衆の支持や革命状況の高まりを必要とした。しかし決め手となるのはむしろ「相当の力を持つ正規軍の存在」であった。強い軍勢力があれば根拠地がつけれる。しかも強い正規軍そのものを養成するために、どうしても適当な根拠地を必要としていた。

その頃にはようやく地方的な赤衛軍のみでは、正規の白色軍隊を打ち破れないことが、ハッキリしてきていたのである。

相当の量の正規軍が置けて、しかも安全な場所はどこか？　そこにまたして少年の頃親しんだ緑林の英雄たちが甦ってきた。「私は感じやすい年頃に読んだ、こういう本によって多くの影響を受けたと信じています」（赤い星）。小説風にいえば、毛は打ちつづく都市攻撃の失敗の中で、「彼らと同じようにやればいいのではないか!?」と思いついたに違いない。匪賊が生き残れるものが、われわれだって生き残れぬ筈はない。単に匪賊の一時利用にとどまらず、匪賊

の生存原理をそっくりそのまま吸収してしまうことである。それを毛は「総合」（総合とは、敵を喰いつくすことである。……大部分を吸収し、小部分を揚棄する。これはマルクスから学んだことである）（杭州における講話）というのであるが、要するにかつてのアナキズムの場合と同じやり方をしているのである。

井岡山は、海拔千数百メートル、湖南・江西両省にまたがり、天然の要塞をなしていた。その上も「土匪や敗残兵の巢窟となっていたところである」（井岡山の闘争）。井岡山のような境界地域にあっては、権力の手も容易に届かない。各地域の長である行政官が実際に統治するのは都市とその周辺のみで、山間僻地、とくに行政区の境界などは、その土地の豪族に治安が任されていたのである。暴動などが起ってもよほどでないと、兵を送ることをしない。したがって中国では、どんな時代にも山間僻地は、反抗分子や匪賊たちにとっての安全な割拠地を提供していた。匪賊のいる地方には政府の苛酷な税吏は近づかないから、土地の農民も自分たちに被害が及ばないかぎり安心していたのである。農民たちは匪賊の態度さえよければ、むしろ歓迎していさえた。

毛は根拠地の利点として、兵士と食糧の補給源であることを挙げているが、財貨の調達の仕方においても、原理的には匪賊と同じやり方をしている。要するに地主・富農からの没収（略

奪）である。（「政府や赤衛隊の経費は白色地区の土豪からの取立に依存している」「井岡山の闘争」。地域農民からの徴税は僅かであった。

ただし財貨調達法が原理的には匪賊と同じであっても、目的は異なっていた。匪賊は己れのためであるが、紅軍は地主を打ち倒す過程が即、ソヴィエトを建設する過程であったのである。それがないと、根拠地はたんなる軍事根拠地になってしまう。

その意味では井岡山はソヴィエトというよりも、多分に軍事根拠地的な性格を持っていた。『井岡山の闘争』でも明らかにしている通り、農民は容易にソヴィエトを理解しようとしなかった。しかし農民が理解しようとしまいと、軍事根拠地は必要であった。毛がそのものズバリ、〈根拠地とは戦いのためのものである〉といっている通り、ソヴィエトもまたたんに生産と生活の場のみでなく、戦いの場でなければならないのである。そこに毛流のソヴィエトの独自性がある。今日の人民公社においても、軍事的色彩が非常に濃厚な理由はここに因を発しているのである。

軍事的根拠地とソヴィエトが重なったのは、やはりその後の瑞金その他の根拠地においてであらう。一九二七年秋に井岡山に入ってから、一九三四年十月長征に出るまでの七年間、紅軍は「中央革命根拠地」「閩浙贛革命根拠地」「浙贛革命根拠地」「川陝革命根拠地」、と次々に

根拠地をつくりあげていった。その最大のものが延安に始まる「陝甘寧革命根拠地」である。（一九四五年解放区十九、人口約一億、紅軍九十萬、民兵二百萬。）文字通り、白色政權の中に紅色政權が打ち立てられた。また日中戦ともなれば、占領地の真只中にも抗日根拠地ができたのである。

その根拠地の社会状況であるが、例えば陝北ではアヘンが禁止され、乞食や失業者はいなくなり、小児奴隷と売淫は消えうせ、各種の労働と抗日の互助組織がつくられた。秘密結社の哥老会ですら合法活動が認められ、工作員には「何らの強制的な命令をせず、大衆を自発的に参加させるために広汎な宣伝を行なうこと」（「赤い星」）が促されていた。そのために農民たちは大部分がソヴィエトを、「我們的政府」（われわれの政府）といっていたという。かつての『湖南農民運動の視察報告』の状況と、ダブっていることに気づかされる。いや、それ以前に海陸豊ソヴィエトのイメージがある。

海陸豊（広東省）ソヴィエトというのは、農民指導者である彭湃らがつくりあげたもので、それは事実上近代中国農民運動の源流をなしていた。一九二二年、出發当初農民組合員僅か五百人であったものが、二六年七月には六十六万人もの大運動になり、その飛火は湖南にも及んだ。この彭湃の運動であるが、ほぼアナルコ・サンジカリズムといってよかった。彭の書いた

文章である「同胞に告ぐ」によると、法律、政府・国家を否定し、私有財産の破壊を称え、社会革命の実行を宣言している。当時は教育を通じての社会革命の実現を考えていたといわれるが、そうした考えの根底には、明らかにアナキズムがみえている。この彭を強く支持していたのが毛であった。そうした毛にあって、ソヴィエトとは同時に無政府であらねばならぬことは当然であった。

毛はある日、ペインの質問にこう答えた。「如何なる政府もあるべきではありません。——人民が治めるべきです。そして共産地区では、あなたは、彼らが自ら治めていることを確かめることができるでしょう」(毛沢東)。實際延安においては紅軍はみな外に出ていて、治安も民衆自身に任されていた。それがソヴィエトであった。ただし民衆の無政府自治は、強大な党と軍の力抜きには、考えることもできなかったこともまた事実である。

(5) 老子の虚無思想

毛沢東における伝統思想は、しばしば説かれるところである。諸子百家との関連においては孟子と比較されたり、墨子の言が引かれたり、時には現代の孔子のようにいわれたりすること

もある。だがめったに、老子との対比において語られることがないのである。もともと日本では道家の思想の影響が少ないから、老荘の視点において中国をみようという訓練ができていないのである。

ところがいったん老子『道德経』八十二章を知てみると、マルクス主義者毛沢東の中にも生々と息づいていることがわかる。老子は伝統中国の背景をなしているのみならず、現代中国にも生きているのである。

その例証については、先に「小国寡民章」を挙げて説明したが、その他にもいろいろある。例えば六十六章に「ここをもつて民に上たらんと欲すれば、必ずしも言をもつてこれに下り、民に先んぜんと欲すれば、必ず身をもつてこれに後る」というのがある。〈統治者はまずへり下る必要がある〉現代風に読めば、これは大衆路線の要諦ということになる。また五十九章には「一国の政治は農夫を手本としなさい」と、「人を治め天に事するは、害にしくはなし」といっている。中国では刑務所は開放的であり、法律が整っていないといわれるが、これなども五十七章の「法令ますます彰かにして、盗賊多くあり」(法令が整えば整うほど犯罪者が増加する)にみあっている。

しかも理想郷(目的)と共に、それを如何に達成するかという方法論と、方法を産みだす世

界の根本哲学において、老子は毛沢東と密接につながっているのである。

毛沢東自ら編集したといわれる中共幹部必読文献に『思想方法論』というのがあるが、毛において方法への関心は著しいものがある。マルクス主義においてレーニンが革命を技術的なものにしたいといわれるが、そうしたマルクス主義における技術的側面をさらに徹底させたのが、スターリンであり、毛沢東である。ことに毛にあっては天性方法的関心の強いところがあつて（子供の頃『論語』をもつて叱る親に、『論語』をもつていい返す方法の有効性を発見している）、その延長するところで優れた戦略家となつた。しかもその戦争方法論は、中国の広大な無辺の特殊状況から必然的に遊撃化したので、包囲と反包囲の非常に流動的な内容を持つてゐる。（毛は戦争を話す時には囲碁に例え、まるでマツチ・ゲームでも愉しむように話した。）

そうした毛の流動的にして、弁証的な戦争論の多くは『孫子』に学んでいるのである。だが流動性と弁証性の方法意識そのものにおいて、毛は老子を吸収しているのである。

因みに『孫子』には、「それ兵の形は水に象る。水の行は高きを避けて低きにおもむく。兵の形は実を避けて虚をうつ。水は地によりて流れを制し、兵は敵によりて勝を制す。故に兵に常勢なく、水に常形なし。よく敵によりて変化して勝をとる者、これを神という」（軍の形は水のようにあれの意）とあるが、老子七十八章には次のようにいう。「天下に水より柔弱なる

はなし。しかも堅強を攻むることこれによく勝るものなし。そのもつてこれを易うることなきをもつてなり。」ともに水の流動性・可変性・順応性をもつて用兵の術を語っているのである。同じ趣旨のヴァリエイションは、七十六章「人の生くるや柔弱、その死するや堅強。草木の生くるや柔脆、その死するや枯槁。故に堅強は死の徒なり、柔弱は生の徒なり」ということになる。

毛沢東の戦略戦術への強度の関心は、『中国革命戦争の戦略問題』（一九三六・十二）として結実するのであるが、この中で毛はいっている。「土地を失うことについての問題であるが、失うことによつて、はじめて失わなくなるといふことは常にあることである。これは『取らうとすればまず与えよ』の原則である。」これは老子三十六章の「まさにこれを奪わんと欲すれば、必ず固くこれに与う」を引いたものである。また六十九章には「われ敢えて主とならずして客となり、敢えて寸を進まずして尺を退く」（進んで戦うより、退いて守った方が勝てる）とあるが、これは毛の戦略的後退による積極防禦論と重なることになる。

かくして毛は老子から戦略論の大まかなヒントをいろいろ与えられているわけであるが、そうした老子の逆説無限の方法論は、彼の説く根本教義である「道」の哲学から出ていることもまた知るべきである。「道」の哲学ひいては虚無の哲学が無限の創造性を産む。

それでは「道」の哲学とは何か。それを自ら次のように説明している。「道は沖なれども、これを用うればあるいは盈たず。淵として万物の宗に似る」(道はう、つろで無としかいようないが、その働きは無限である。深遠で、万物はその奥底から湧きでるかのようだ)。「道」とは即ち万物を産みだすものである。形は有から生れるが、さらに有は無から生れる。結局「道」とは無であり、世界の働きの一切がこれを基とする。老子はおよそそういつているのである。禪語にいう「無一物中無尽蔵」で、無は一見からっぽであるが、そこからは無限に創造されるものがある。

老子はそれをさらに判りやすく、巧みな比喻に乗せて次のようにもいつている。五章へファイゴの中はうつろだからこそ、無尽蔵である。動けばいくつでも風が吹きでる。十一章へ轂の中がうつろだから、そこに心棒を通して車輪が廻せる。同様に中がうつろだから物が入れられる。出入口がうつろだから部屋が使える。一見有用にみえる現象の部分は役立たないで、むしろ実際に役立つのは、役立たないようにみえる部分である。それを無用の用として、ここでも老子は方法家即実家として顔を出しているのである。

この老子の虚無思想を毛沢東に当てはめることは、充分可能である。プロ文革終息期においてしきりと「闢私批修」「破私立公」が叫ばれたが、それは直接的には顕在する利己の意味あ

いで個人主義批判であろうが、つきつめれば老子の意味するような虚無までゆく筈である。七章「その私なきをもつてにあらずや。故によくその私を成す」、二十一章「孔徳の容は、ただ道にこれ従う」自己を没却するからこそ、自己を確立できるのであり、「道」と一体化した時に人間は全き自由を得る。人は虚無において如何なる状態にも迅速に対処できるのである。革命家はそういうものでなければならぬ。調査に当っては、「まず小学生たれ」といつているのも同じことで、こちらが無であればいくつでも対象をつめ込むことができる。(四十九章「聖人は常心なし。百姓の心をもつて心となす。」)いくつでもつめ込むことができるから、時に臨んでいくつでも中からとりだすことができる。

このような老子における、無と有との同時性と転換性をみることが必要である。老子の虚無は有無の無であって、仏教的な空無の無とは異なる。虚無は一方では莊子のような羽化登仙の遊興の世界を生むが、他方では韓非子のような現実方法の世界を生む。その両者をまた毛は一身に供えているのである。

天高く 雲淡し

望断 南に飛ぶ 雁

長城に到らざれば好漢に非ずとよ

指を屈^かれば 行程 二万（里） 「毛沢東その詩と人生」より

毛の詩にあっては、いづれも現実世界をうたつて足は地上を離れるということがない。しかも氣宇壮大、そこには宇宙的^{コスモポリタン}精神といえる世界が開かれている。もともと中国人は社交上手であるが、ことに毛は対談に優れており、談論風発、誰しにも「春風駘蕩」の大人を感じさせるようである。手近なところでは、野間宏を団長とする日本文学者団の接見記録を読んでみても、そんな雰囲気がある。だが同じ人でもいったん戦いの場になれば忽ち「実事求是」の^{リアリズム}実践家となり、敵を殲滅して止まぬ戦^{プロ・ファイ}略家と化するのである。詩情ロマンの人であるだけ、逆転すると、激越な破壊者に変貌する。老子流の虚無思想においては、健康な自然人であつたものが、ここでは悪魔的なニヒリズムの様相を帯び始めるのである。

(6) 阿修羅ニヒリズム

ペインは毛の井岡山時代について、「一度暴動が起つたが、恐るべき力によって鎮められた」（『毛沢東』）といっている。どの事件のことであろうか。毛は井岡上に登ると、「直ちに最も親しい同僚二人を銃殺に処した」といわれる。さらに一九二七年十二月には広東コミューンが宣

せられたが、蜂起者たちは政府軍の攻撃を持ちこたえることができなかった。この時井岡山の兵士たちは、毛に広東に援軍を送るよう要求したが、毛は陽動的な小戦闘を行なったのみで、本格的には援助しなかった。しかも毛はこうした軍隊内の全不満分子に対するに死をもつてし、四千三百人の兵士を銃殺したのである。（ともにアショカ・カダタスコットアイア『毛沢東の政治的肖像』による。）

毛はこの時代について語りながら、「自分はいつも武松を想いだした」といっている。武松とはむろん『水滸伝』中の、景陽山脈で虎を自分の手で殺した山賊である。「虎は怒らせられようが、られまいが、人々を喰おうとするだろう。虎を殺すか、虎に喰われるか、どちらかを選ばなければならない。」殺らなければ殺られてしまう。この論理は初源的には子供の頃から持っているが、湖南自治運動の際に「君が政治・法律に手をださなければ、政治・法律の方でたえず君に手をだしてくる」と民衆に呼びかけているのと同じ論理である。

その酷薄な真实性を、その後毛は身をもって深刻に感じざるを得なかった。毛の身の回りに多大な血が流されたのである。仮に学生時代の友人を拾ってみるだけでも、郭亮・向警予・陳昌・羅学瓚・張昆弟・蔡和森・夏曦・何叔衡とみな今は亡き人々である。ある者は壁に釘ではりつけにされ、ある者は崖から飛び降りて悲惨な最後を遂げた。妻も殺された。いとも殺

された、弟も殺された。なかなずく軍閥何鍵^{カギ}の手による妻楊開慧の死（一九三二）は、彼をして絶望の淵に追い込むと同時に、復讐鬼の世界に翻身^{フウシン}させたに違いないのである。毛はさりげなく、「犠牲なくして革命はない」という。だがそのことばの背景には、自らの罫^カりの死という重い現実があるのである。

毛の共産主義あるいは人間像も、そうした道筋で考えねばならない。

ある日、延安にやってきた大学教授が、「共産主義は愛です」といったのに対し、毛はキツとして答えた。「同志よ、それは違います。そんなに簡単なものではありません。」「共産主義は愛ではありません。それは敵を壊滅させるためのハンマーです。」「（毛沢東）。ハンマーとは、普遍化して言えば手段であり、技術であり、戦略ということになる。しかしもっと直截には、武器に他ならないのであり、武器が行使されるところで戦いを意味することになる。革命、すべての価値基準は、革命でしかあり得ない。レーニンはマルクス主義を分析して三つの源泉（史的唯物論、経済学、社会主義）を持つというが、毛にあってはほとんど一つの源泉でしかない。マルクス主義、それは社会主義の中の社会主義、"革命"であるといわんばかりである。

一九四五年、毛がまだ延安にいた頃、親しい一アメリカ人にこんなこともいったといわれ

る。「あなたは真に偉大な人物とは、多数のために善を行なう人間のことだといわれるが、それは誤りです。千度も誤りです。」「そうではないのです。歴史が教える偉大さの尺度はもつと別のものです。」「真に偉大な人間とは、人間の血を流すことのできる人物のことです。」「（政治的肖像）。最後のことは、急に裏声になり、それは夜鳥の叫びを思わせたという。カダタスコタイアはこれを反毛的言辭として利用しているのであるが、毛にしてみれば正気であった。彼は真面目すぎるほど真面目なのであって、自らいっているように歴史の教訓を現実生きようとしていた。ただしその歴史的教訓をもたらす人物の最大のものが、秦の始皇帝であり、漢の武帝という、中国独裁君主中の独裁君主であったまでのことである。

その実践として、反毛分子の情容赦もない徹底弾圧があった。毛のやり方は絶えず二本立て、一方に教育があつて、他方に暴力があるという具合である。他方の暴力の方はなかなか公表されないが、それは彼自身にとっては隠す要もない、当然の手段として行なわれているのである。その一端をカダタスコタイアが明らかにしている。それによると、一九三〇年春には、第一軍の指揮者である薛子正が毛の指令によって暗殺されている。同時に彼の指揮下にあった委員百七十人、党員五百人、膨大な数の兵士が殺戮された。同じ年の十二月、福州事件というのがあった。福州（江西省）には共産党の指導機関があつて、彼らが毛の路線に反対を称

えるや、すぐさま兵を送って百七十人を逮捕し、党員の若干名を生きながら焼き殺した。怒った一部隊が戦闘態勢に入るや、またしても毛は井岡山の自分の軍を進発させて、二週間で壊滅した。

反毛運動として有名なのは、富田事件（一九三〇）である。この事件については毛自身もスノーに語っていて、第二十軍の劉敵藻^{リウキョウソウ}の叛乱だとしている。当時劉は李立三派で、毛の富農優遇政策に反対して、江西西南特別委員会とせしめあわせて大会を開いた。それをA・B団（アンティ・ボルシェヴィキ団、反共スパイ団）にひっかけて関係者とみられるものをみな殺しにしてしまったのである。公表した数は劉の軍だけで四千四百人、全軍で二万人以上であったといわれる。

延安の思想改造運動は、一九四二年二月、延安党学校開校式での、毛の三風（学風・党风・文風）整頓の呼びかけに始まるとされている。しかしそれに先だって、前年秋に「作風整頓運動」という名の血の粛清が行なわれている。その目撃者であるアメリカ人の医者は、「毎晩拷問される者の号泣と悲鳴で眠れなかった」と語った。彼は「毎朝、康生の手先どもが毛の命令で首を切った場所に血溜りを見出した。この医者は毛の許へ行き、自分と毛との友情を頼みに、殺人を止めるよう説き伏せようとした。だが、毛はその忠告に耳を藉さなかった。」（『政治

的肖像』）。この事件については、中国では誰もがみな沈黙している。しかし毛自身がインドネシア共産党の故アイデイトに、自慢げに「山西で、私は一撃で二万人の中堅職員を殺した」と語っているのである。

中国の公表された運動の背景には、必ず血がつきまといっていると考えていいのである。毛にとって、「曲げなければ伸ばせない」（老子）が運動原則である。その場合「曲げる」とは、殺・関（監禁労働）・管（大衆監督）・放（大衆中の改造）とあって、反対派鎮圧のトップには処刑が据えられている（十大関係を論ず）。即ち一般大衆は教育運動で、反対派の中核には死を、ということになる。ただし中核部分といえども、宣伝の面で有効なものは、例え元財閥、偏向者・掃共司令であろうと優遇する。だいたいそういうことになっている。その点で毛こそ、バクーニンがテロリスト・ネチャーエフとの親交時代に書いた『革命家の教理問答』の体現者のようにみえてくる。「問答」の（一）には次のようにある。「革命家は運命の定められた人間である。彼は個人的利害、業務、感情、愛着、財産、自分自身の名前すらも持たない。彼にあっては一切が一つの排他的な関心、一つの思想、一つの情熱——革命に吸収されている。」文中には、「彼は世論を侮蔑する」「冷酷な打算と結びつかねばならない」、などということばも含まれているのである。

革命後においても、むろん血の制裁は生きている。「タイに在住する中国人避難民たちはその会報『中字』（一九六五・五・一）で十年間に中国大陸で殺された人数を二千五百万人以上と計算した。」「一九五二年に毛はいわゆる『三反五反運動』をくり広げることを命令した。……数十万の人間が捕えられ、引きつづいて大量死刑が行なわれた。」「一九五九年中頃『大躍進』と『人民公社』政策の失敗が明らかになった時点では、『不平分子は巨大な強制収容所へ追いやられた。そこには数百万人の囚人が監禁されていた。』『中国に留学していたアフリカの一学生が私に話してくれたことだが、一九六六年の八月にこの留学生は、武漢大学内で発行されたビラを読んだ。そのビラには毛の政府が一九六〇年の一年間に殺した人間の数は、抗日戦争の全期間中に戦死した人数よりも多いと書かれていた。』（以上いずれも『政治的肖像』による）。（一九五二年十月、アメリカ全国労働総同盟自由労働組合委員会は、毛政権は過去五年間に一千四百万以上殺したと声明した。）

毛自身もいうように、〈革命は紳士連中のなやかな宴会ではないのである〉。「革命は暴動であり、一つの階級が他の階級を打ち倒す猛烈な行動である」（『報告』）。「文化大革命」とはまさしく革命であって、この期間中訪中した某中国研究家によると、江西のある紅衛兵新聞において毛は、「この革命中、十万人とはいわないが十万人近くの人間が死んでいる」と語ってい

たそうである。最近になって始皇帝の「焚書坑儒」（書物を焼き、儒者を穴に埋める）を、前代に比して進歩的なものと認める論調が表われているが、香港逃亡者の記録からしても、文革中実際に大量の「焚書坑儒」が行なわれたことが窺える。（その猛烈さの一部をわれわれも耳にすることができた。）毛にとっては革命において神はないのであり、神は歴史において証明される。一九六四年十月、外相陳毅は外人記者に「唐代人口は一億六千万であったが、戦争がすんで僅か四千万になった。その時以来中国は再び隆盛になり、現在では七億を算えている」と語った。それが中国が戦争を恐れない理由である。同じ意味のことを、その七年前に毛は原子力戦争にひっかけていつている。〈核戦争敢えて辞せず〉である。

こうなると、彼の革命観なり、歴史観そのものの検討が要求されることになるが、そうした革命観・歴史観をもつ毛自身の虚無感もまぬがれ難いのである。彼は親しいアメリカの友エドガー・スノーに語っている。「私はいわば、破れ傘を片手に歩む孤独な修道僧にすぎないのだ……」と。ここにおいてわれわれは、毛の胸中に、章炳麟から魯迅へ、そして毛にと承けつがれてきた、黒光りするニヒリズムの存在を認めざるを得ない。